

1. こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」とそっと言った。マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。さてイエスは、まだ村に入らないで、マルタが出迎えた場所におられた。マリヤとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだろうと思い、彼女について行った。(11:28-31)
 - a. ラザロをよみがえらせればイエスの神性を示す十分なしるしになるであろうが、イエスは注目されるのを好まなかったようである。イエスは外にとどまられ、家の外でひそかにマリヤを呼ばれた。
 - b. イエスの謙虚さと柔和さに注目したい。イエスはすべての人々に信仰をもってほしいと願っておられたが、力によって人々を引き寄せようとしたのではない。しようと思えばすべての人が見える所で奇跡を行い、何万人もの人を集めることもできたであろうが、それは表面的、肉的な転向にすぎない。しるしは私たちを神へと向けるためのもので、神の代わりのもを信じさせるためのものではない。
 - c. これは御霊に歩むことと肉に歩むことの違いである。肉によって御霊の実を結ぼうとしないように気を付けたい。肉によるものとは恵みの領域を超えたものすべてのことを言う。私たちが「自分でやった」「神様がしてくれるべき」「受けて当然」というような思いになる時は恵みの領域を超えた時である(自分のことを責任を持って管理する必要があると言っているのではない。それについては改めて説教をしなくてはならない)。
2. マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかる、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、(11:32-33)
 - a. マリヤはマルタと同じ言葉を口にしてしている。もしかしたら「疑いの種」はマリヤとマルタを「慰めるために」その場にいたユダヤ人たちから植え付けられたのかもしれない。これを「疑いの種」と呼んだのは、神様にはどんなことでも — たとえ死人をよみがえらせることでも可能であるのに、マリヤとマルタの可能性の領域には入っていない。彼女たちの思考の中ではすでに終わってしまったことで、もうなすすべがないというのである。
 - b. イエスは心を動かされ憤られた。これは人としてのイエスを表している。イエスは私たちと悲しみを分かち合ってください。マリヤが足もとにひれ伏すのをご覧になり、良い結果になることをおわかりでも私たちのことを気遣っててください。
 - c. イエスは心の動揺を感じたと書かれているが、この言葉はもとのギリシャ語では「憐み」よりも「憤り」という意味で使われる。イエスが憤りを覚えられたのはここに居合わせた「ユダヤ人」たちが一緒に泣いていたからである。彼らはマリヤとマルタを慰めラザロの死を悲しむというよりもイエスがメシヤであることを信じていなかったからである。
3. 言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧ください。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と言う者もいた。(11:34-37)
 - a. イエスは偽善的な会葬者たちにはかまわず、遣わされた本来の目的を果たそうとされる。ここでもイエスは嘆き悲しむ者たちと悲しみを分かち合い「涙を流された」。
 - b. 家族を慰めるために来ていたユダヤ人たちは「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか。」と言い、疑いの種を蒔いた。この後ラザロが生き返ってからも、何人かの者はイエスがメシヤであることを信じず、祭司長たちのもとに行き、イエスだけでなくラザロまでも殺そうと相談する(12:9-11)。
 - c. この世において神とともに歩むことは決して楽ではない。イエスはご自分と歩む者は迫害に会うと言われた。しかしイエスとともに歩むことはそれだけの価値がある。イエスは決して私たちが離れたり見捨てたりなさらない。迫害には報酬があり、イエスはこの地すべてを治められ、この地でともに歩み苦しんだものには天においてすばらしい報いがある。